『源氏物語』の年齢明示の方法

――小野の母尼を中心に――

外山敦子

はじめに

物語では、すべての登場人物についての年齢が語られるわけではない。特に、脇役・端役とよばれるような人物に具体的な年齢が語られる例は、決して多くはないのである。『源氏物語』においても、登場人物の年齢が具体的に語られる例は必ずしも多くなく、年立から特定あるいは推定できる登場人物も一部に限られる。物語は、必要な人物、必要な場面にのみ年齢を語っているのだ。そうした中にあって、物語が登場人物の年齢を明示することがあるとすれば、その示された年齢（＝数字）は特別な意味を帯びることになるのではなかろうか。決して例が多くないだけに、逆に、物語読者にとっては登場人物の年齢が有力な〈情報〉の一つとなりうると思われる。

本稿では、『源氏物語』手習巻に登場する横川の僧都の母尼が「八十あまり」と紹介されて物語に登場していることに着目し、その語られた年齢と物語における母尼の役割との主題的な連関性を考察する。そもそも「八十あまり」という年齢は、『源氏物語』の年齢が確認できる登場人物のなかでは最高齢であり、その特異さが際立っている。では、「八十あまり」という年齢を語ることで、物語はどのような機能を母尼に要請し、それによって物語はどのように展開しているのだろうか。語られた〈年齢〉が〈物語内容〉を紡ぎ出していく物語のありようを、以下に詳述してみたい。

一　語られる年齢――自立する登場人物――

『源氏物語』における「そのころ」という巻頭の語り出しは、これまでの巻とは異なる物語の始まりを宣言する。(1) 本稿が取り上げる手習巻もまた、

そのころ横川に、なにがし僧都とかいひて、いと尊き人住みけり。八十あまりの母、五十ばかりの妹ありけり。［手習・二七

九頁」[2]

と、これから新たな物語が始まるであろうことを冒頭で語っているのである。新たな物語は、新たな登場人物と舞台とを要請する。それが、「なにがし僧都」（「横川の僧都」と通称）であり、「宇治院」や「小野」なのであった。横川の僧都は、宇治の寝殿から失踪し行方不明になっていた浮舟を助け、のちに浮舟を出家に導くという重要な役割を担い、物語を大きく突き動かしていく人物である。[3]

ところで、この冒頭では、横川の僧都に「八十あまりの母、五十ばかりの妹」がいたと語られている。前述したように、『源氏物語』に登場人物の年齢が明示されることは決して多くない。そうした中で、横川の僧都の母と妹の年齢が、あえて語られることの意味は重要ではないだろうか。しかも、それが巻頭で語られていることは、おそらく物語展開上の何らかの理由があると推測される。

母尼が、初瀬詣の帰途、危篤状態になったという知らせを聞いた横川の僧都は、「限りのさま」［手習・二七九頁］だと判断し、「山籠りの本意深く、今年は出でじ」［手習・二七九頁］という決意を翻して山を下りた。母が八十歳を越える高齢であるため、いつ死を迎えても不思議はないと考えたのであろう。そして偶然浮舟が発見されたのである。つまり、横川の僧都による浮舟発見は、母尼の高齢なくしてはあり得なかったのだ。母尼が高年齢に設定された必然性は、とりあえずこの点に求めることができる。しかしそれは、母尼の年齢に「80」という具体的な数字が示されるべき明解な説明にはなり得まい。母尼の年齢明示は、どのように説明されるべきなのだろうか。

『河海抄』以来、横川の僧都のモデルには『往生要集』の著者である恵心僧都源信が指摘されており、ほぼ定説となっている。源信の母と妹（安養尼）についての説話もいくつか残されており、それが、手習巻に登場する横川の僧都の家族構成と対応する点も見逃せない。[4] 永井和子氏は、源信の母の伝として残されている説話等から母の年齢を推定し、手習巻の母尼に「八十あまり」という年齢が設定された根拠を探っている。[5]

まず、氏は源信の母の往生譚を記す『今昔物語集』巻第十五「源信僧都母尼往生語第三十九」に着目する。[6] 源信母子の年齢は史実としては未詳である。しかし、氏は、この説話で語る「三条ノ大后ノ宮ノ御八講」を「長徳二年八月十六日太皇太后法花八講」（『小右記』に記載）とする説[7]を根拠に、『今昔物語集』巻第十二「横川源信僧都語第三十二」が伝える源信の死亡年時（寛仁元年六月十日、七十六歳にて寂）から逆算して、「三条ノ大后ノ宮ノ御八講」を、源信五十五歳の年であるとした。源信の母の卒年は「三条ノ大后ノ宮ノ御八講」から九年後なので、源信の母は、源信が六十四歳のときに死去したと想定できるのだ。ちなみに『源氏物語』手習巻冒頭で、横川の僧都が、母尼の危篤の報を受けたときの年齢は「六十にあまる年齢」［手習・二八六頁］である。つまり、手習巻の横川の僧都の年齢と『今昔物語集』から読み取れる源信の年齢は、ほぼ一致し

ているのである。以上を踏まえて、永井氏は「事実としての母の長寿に関しては今のところ明証を欠くというほかはない。源氏物語作者の創作であり、従って意識的な作為とも考えられるのであるが、源信を横川の僧都に見立てることがほぼ確実であるとすれば、母の高齢もあるいは事実をもとにしたと見ることもできるかもしれない。」[8]と述べている。

永井氏の説は、横川の僧都の母尼の「八十あまり」という年齢設定に、モデルとしての源信の母が関連する可能性を提示する。このことは、手習巻冒頭と『今昔物語集』巻第十五の母伝が、ともに「山籠もりの本意深い僧都が母の死を予感し、母の念仏往生を助けるために下山する」という共通点を持つことからも、説得力がある。手習巻の横川の僧都は、母尼重体の知らせを受けると、「母の命」を助けるためではなく「母の往生」を助けるために下山を決意している。僧都らは母尼の死を予感しているのである。それは読者も同様であろう。読者は、手習巻の母尼の「八十あまり」という年齢から源信の母を想起し、さらにその源信の母の念仏往生譚を重ね合わせることで、手習巻の母尼の死を確信するのである。手習巻の母尼は、源信の母の逸話との照合により、限りなく死に近いものとして読者に認識されていくのではなかろうか。

しかし、読者の予想は裏切られた。手習巻の母尼は手習巻冒頭で死ぬことなく、その後も物語に登場し続けるのだ。手習巻に語られる「八十あまり」という年齢は、モデルとしての源信の母を読者に想起させ、母尼の死を予感させる役割を担っていたはずである。しかし登場人物はモデルを離れ、自立して「生きていく」のだ。永井氏は、母尼登場の意義について「物語の筋の上の要請からすれば、母尼君の老年者としての役割はほぼここ（＝手習巻冒頭…外山注）に尽きているのではないだろうか。僧都と浮舟を結びつけるためにはこの母の高年齢がどうしても必要であった。そのあとの部分の母尼君はむしろつけたしである。」と述べている。[9]しかし手習巻の母尼の役割、物語のなかでの固有の機能は、その冒頭部分よりもむしろモデルからずれていった後の物語展開から読みとるべきではなかろうか。そして、手習巻で語られる母尼の年齢設定は、必ずしもモデル（源信の母）にのみ還元される問題なのではなく、それ以後の物語における母尼の本質的な機能を保障する、極めて重要な〈情報〉として理解すべきものなのである。

二　母尼の二面性 ―「昔」をめぐる物語と二人の老人―

母尼の年齢である「80」という数字そのものの考察を試みる前に、手習巻冒頭以後の、物語における母尼の役割を確認しておく。その際、母尼とともに年齢が語られた「五十ばかり」の妹尼と比較することで、ともに老人である母娘の年齢の相違が、物語の要請する彼女たちの役割の相違に対応していることを確認する。

手習巻には「昔」の用例が二八例ある。[10]これは若菜上巻の三七例、宿木巻の三〇例に次ぐ数であり、「昔」は手習巻読解の重要な

鍵語として注目に値すると考えられる。清水好子氏は、若菜巻の「昔」が「光源氏四十年の生涯の大事」を指し示し、その「昔」ということばは、「物語第一部に書かれた過去との照応において、新しい世界を進めてゆこうとする基本的態度を確認させるもの」[11]だとする。清水氏の指摘は、同じく宿木巻の「昔」に関しても当てはめることができよう。宿木巻では、薫や中の君、そして弁の尼らが、大君の生きていた「昔」を思い出し、涙する。大君は残された人々に「昔の人」と呼ばれ、この巻で初めて登場する浮舟は「昔の人」である大君と比較されていく。浮舟の物語は「昔」との対応関係によって新たに生み出されていった物語なのである。清水氏の言葉を借りるならば、宿木巻の「昔」とは、亡き大君生前の頃を指し示し、亡き大君という「過去との照応において」「新しい世界」（＝浮舟物語）を「進めてゆこうとする」のだ。

では、手習巻の「昔」はどうか。結論を先に述べるならば、手習巻では、浮舟、妹尼、そして母尼が想起する「昔」は、あくまでもそれぞれにとっての「昔」なのであって、同じ「昔」と呼ばれていても実はそれぞれに全く異なる〈時間〉なのである。当然、「昔」に対する思いもそれぞれが別方向を向き、すれ違ってしまっている。したがって、手習巻の「昔」は若菜・宿木両巻のように「新しい世界」を進めることはできず、宙に浮いたままになる。そこに、手習巻の物語固有のありようを読むことができるのではなかろうか。この「昔」ということばが重要なのは、単に用例数が多いためだけではない。手習巻独自のありようを象徴する「昔」は、母尼と妹尼の役割の違いをも浮き彫りにしていくのだ。

横川の僧都の妹尼は、亡き娘の代わりにという思いから、意識不明の浮舟に手厚い介抱を施し、その甲斐あって浮舟はほどなく快癒する。浮舟自身は出家を望むばかりで妹尼にも事情を明かそうとしないが、妹尼は浮舟を初瀬の観音から授かったものと信じ、喜んで浮舟の世話をするのであった。そこに新たな人物、妹尼の亡き娘の婿であった中将が登場する。

尼君の昔の婿の君、今は中将にてものしたまひける、弟の禅師の君、僧都の御もとにものしたまひける、山籠りしたるをとぶらひに、はらからの君たち常に上りけり。〔手習・三〇四頁〕

「昔の婿の君」と呼ばれる中将は、亡き妻を忘れかねて妹尼のもとを訪問する。妹尼にとっても、亡き娘の生きていた「昔」はとうてい忘れることはできない。そこで、妹尼と中将は慰め合うように、忘れがたい「昔」のことを互いに語り合うのである。つまり、妹尼と中将は、「昔」に対する共通する思いによって繋がっているといえる。

前近き女郎花を折りて、「何にほふらん」と口ずさびて、独りごち立てり。「人のもの言ひを、さすがに思し咎むるこそ」など、古代の人どもはものめでをしあへり。「いときよげに、あらまほしくもねびまさりたまひにけるかな。同じくは、昔のやうにても見たてまつらばや」（中略）と尼君のたまひて、（後

略）。［手習・三〇九頁］

妹尼は、「昔」よりも一段と立派になった中将を「昔のやうに」婿として迎えたいと言う。妹尼は、取り返しのきかない「昔」（娘が生きていた時間）に思いを馳せ、懐かしく語り、あるいは涙するというだけではなかった。むしろ積極的に、娘の身代わりを賜ることを初瀬で願い、その結果として浮舟を得ただけではなく、さらにはその娘代わりの浮舟に「昔のやうに」中将を通わせて、「昔」を今に再現し、取り返そうとさえ望むのである。なぜそこまで妹尼は「昔」に執着するのだろうか。そこには彼女の〈年齢〉が関わっていよう。妹尼は「五十ばかり」の老人である。時間を重ねて生きてきた老人にとって、過ぎ去った「昔」は自分の〈生〉の証なのだ。その「昔」を振り返りつつ、それを支えとして、老人は残りわずかな〈生〉を全うしようとするのである。もちろん、このように「昔」に執着する老人は妹尼だけではない。小野の草庵に仕える老尼たちもやはり、彼女と同じように「昔」の再現を望んでいる。

御前なる人人、「故姫君のおはしまいたる心地のみしはべるに、中将殿をさへ見たてまつれば、いとあはれにこそ。同じくは、昔のさまにておはしまさせばや。いとよき御あはひならむかし」と言ひあへるを、あないみじや。世にありて、いかにもいかにも人に見えんこそ、それにつけてぞ昔のこと思ひ出でらるべき、さやうの筋は、思ひ絶えて忘れなん、と思ふ。［手習・三〇七頁］

しかし、浮舟にとってみれば、そうした老尼たちの発言は煩わしい以外のなにものでもなかった。老尼たちの「昔」への思いを聞いて、浮舟も自分自身の「昔」を思い出す。しかし、妹尼や老尼たちが「昔」の再現を切望すればするほど、反対に浮舟は「昔」を「思ひ絶えて忘れなん」と思い、心を閉ざしてしまう。妹尼たちの「昔」への執着は、浮舟の捨て去りたい「昔」を呼び覚ますことになり、結果として彼女を一層苦しめていくことになるのである。こうして、妹尼と浮舟は、「昔」を軸に、確実にすれ違っていくことになる。

しかし、そうした小野の草庵にも、浮舟を中将の懸想から救う人物が一人だけいた。それが「八十あまり」の母尼である。母尼は、「昔」を再現しようとする妹尼の思惑をことごとくうち砕いてしまうのである。

浮舟は中将の再三の働きかけにも返歌すらしようとしなかった。固り果てた妹尼は、とうとう浮舟の気持ちを無視し、中将を受け入れる旨を勝手に伝えてしまった。それは、「昔」に固執する妹尼の執念の行動とでもいうべきものであった。そして、その執念がようやく実を結ぶかと思われたまさにその時、思わぬ事態が起こったのである。

この大尼君、笛の音をほのかに聞きつけたりければ、さすがにめでて出で来たり。ここかしこうちしはぶき、あさましきわななき声にて、なかなか昔のことなどもかけて言はず。誰とも思ひわかぬなるべし。［手習・三一八～三一九頁］

中将は浮舟に自分の存在を知らせようと横笛を吹いていたのだが、その笛の音に魅せられて出てきたのは浮舟ではなく、皮肉にも「八十あまり」の母尼なのであった。高齢の母尼は咳をしながら震え声で語る。しかし、それは妹尼のような「昔」語りでなかった。「八十あまり」の母尼には、「五十ばかり」の妹尼とは比較にならぬほど数多くの「昔」の思い出があるはずだ。にもかかわず、母尼は「昔」のことなどおくびにも出さない。なぜなら母尼は、「昔」の（孫娘の）婿君であった中将のことさえ誰か分からなくなっているのだ。つまり、妹尼よりもはるかに年老いた母尼は、すでに呆けてしまっており「昔」のことをすっかり忘れてしまったのだ。さらに母尼は、中将の笛の音を愛でて自らも古めかしい和琴を弾く。一座の興はすっかり冷め果て、結局中将は浮舟と契ることなく小野を立ち去っていった。妹尼の執着する「昔」は再現されることなく終わってしまったのである。「昔」を捨て去りたかった浮舟を救ったのは、「昔」をすでに捨て去った「八十あまり」の母尼なのであった。

こうして母尼の存在によって難を逃れ得た浮舟なのであったが、またしても危機が訪れる。浮舟との契ることなく立ち去った中将が、今度は妹尼不在の折に小野を訪れたのである。少将の尼から中将の話し相手をするようにと強く進められた浮舟は、身の危険を感じ、母尼の部屋に身を隠すのであった。そして、またしても母尼のおかげで中将から逃れることには成功したのだが、その母尼の部屋で浮舟はさらに恐ろしい体験をすることになる。

姫君は、いとむつかしとのみ聞く老人のあたりにうつぶし臥して、寝も寝られず。宵まどひは、えもいはずおどろおどろしきいびきしつつ、前にも、うちすがひたる尼ども二人臥して、劣らじといびきあはせたり。いと恐ろしう、今宵この人々にや食はれなんと思ふも、惜しからぬ身なれど、例の心弱さは、一つ橋危がりて帰り来たりけん者のやうに、わびしくおぼゆ。［手習・三二九頁］

夜半ばかりにやなりぬらん、と思ふほどに、尼君しはぶきおぼほれて起きにたり。灯影に、頭つきはいと白きに、黒きものをかづきて、この君の臥したまへるをあやしがりて、鼬とかいふなるものがさるわざする、額に手を当てて、「あやし。これは誰ぞ」と、執念げなる声にて見おこせたる、さらに、ただ今食ひてむとするとぞおぼゆる。［手習・三三〇頁］

高齢のため「宵まどひ」をしていた母尼は「おどろおどろしきいびき」をかき、「しはぶき」をし、「執念げなる声」を出す。老齢ゆえの寝姿であるが、その母尼の相貌は、浮舟の脳裏に宇治の寝殿から入水を計ろうとしたときのことを思い起こさせる。あのとき浮舟は「鬼も何も食ひて失ひてよ」［手習・二九六頁］と思い、その記憶は今でも「鬼のとりもて来けんほど」［手習・三三〇頁］と思い出していた。浮舟は恐ろしい母尼の相貌に「今宵この人々にや食はれなん」「ただ今食ひてむとする」とおびえる。このときの母尼の寝姿は、浮舟にとって「鬼」と同じなのであった。母尼の「鬼」の

ような相貌は、図らずも浮舟に「昔」、宇治の寝殿からの逃避したときの記憶を思い起こさせてしまったのである。そして翌朝、中将の懸想から逃避するかのように、浮舟は横川の僧都に剃髪を依頼し、尼になってしまうのだが、その依頼を僧都に取り次いだのは、他ならぬ「八十あまり」の母尼であった。

「五十ばかり」の老人である妹尼が執着する「昔」に翻弄される浮舟は、「八十あまり」の母尼によって図らずも二度までも救われる。しかし同時に、「八十あまり」の母尼の相貌は浮舟を脅かし、ついには出家へと至らしめた。以上のように、母尼と妹尼の年齢は、それぞれの年齢による役割分担を物語が要請するため、明示されたものであった。

三　「年八十」という律令コード

前節で、小野の母尼は高齢ゆえに、浮舟を救いながらも同時に脅かしていくという二面性を有していたことを確認した。母尼の高齢とは、浮舟の蘇生から出家に至るまでの過程に不可欠な要素なのであり、それゆえに母尼は物語のなかで（源信の母のように死ぬことなく）生かされてきたともいえる。では、なぜ高齢である母尼に、「八十あまり」という具体的な年齢が設定されなければならなかったのであろうか。80歳という年齢には、どのような特別な意味があるのだろうか。

そもそも「八十（やそ）」ということばは、言うまでもなく数値としての「80」を表したものだが、「八十島」や「八十神」などのように「数え切れないほどたくさん」という意味もある。だとすれば、年齢を表す「八十（やそぢ）」も、「生誕から数えて80年」という具体的な数値を表すと同時に、「数え切れないほどたくさんの年齢」という意味をも併せ持つのではなかろうか。例えば、平安中期の天台宗の僧で、名利名聞を捨て高徳の隠遁聖人と仰がれた増賀に、

みづはさすやそぢあまりの老のなみくらげのほねにあひにけるかな[12]

という辞世の歌がある。「くらげのほねにあ」うとは、あり得ないことに出会うたとえで、この場合は極楽往生を指している。増賀は、「普通の人間ならばあり得ないほど長生きをしたために、あり得ないことに出会うことができた。極楽往生ができそうだ。」というのである。増賀は延喜十七年（九一七）生で、長保五年（一〇〇三）に87歳で没しているので、「やそぢあまり」は増賀の年齢をそのまま表したことにもなるのだが、和歌ではそうした具体的な年齢と同時に「普通ならあり得ない、数え切れないほどの高齢」という意味を有しており、だからこそ歌の意味が厚みを増していると考えられる。増賀の辞世の歌と同じように、手習巻の母尼の「八十あまり」という年齢を表したことばにも、「80歳をこえた年齢」という数値と同時に「普通ならあり得ない、数え切れないほどの高齢」という意味を併せ持つと読むべき可能性は充分あるだろう。

母尼の「八十あまり」という設定が、常人を越えた（高齢である）

存在を含意するということは、「八十（やそぢ）」ということばそれ自体からだけではなさそうだ。というのも、平安時代は社会的にも80歳という年齢をそれ以下の年齢とは区別し、常人を越えた存在として扱っていたからである。そのことを、当時の最も有力な社会的規範であったと思われる律令から読み取ってみる。

戸令第八・11には、八十歳以上の老人への優遇措置についての規定がある。

凡そ年八十及び篤疾には、侍一人給へ。九十に二人。百歳に五人。（後略）[13]

これによると、八十歳以上の老人と重度の身体障害者には「侍」を給することになっていたことが分かる。この給侍に関して、日本思想大系の補注は、

古くは礼記の王制篇に「凡三王養老皆引年。八十者、一子不従政。九十者、其家不従政。廃疾非人不養者、一人不従政」とあるように、この条は儒教の伝統的な理念に基づいている。侍丁には徭役が免除されたが（賦役19）、とくに祖父母父母が老疾で家に兼丁がないときには、侍に専念できるように配慮されていた（刑罰の執行方法の変更→名例26 27。衛士・防人への差点の免除→軍防16。解官→選叙22）。それと同時に祖父母父母への侍に違反した官人は特別な刑に処せられた（名例20・職制31）。［五五三頁］

と解く。さらに同書の頭注には、

八十以上…篤疾と共に侍を給され（戸令11）、高年として賑給の対象ともなった。［四〇頁］

との説明もある。「賑給」とは人民に対する天皇の恩勅で、民には食料等、官人には加冠などが行われている。八十歳以上の老人に行われるこれらの優遇措置は、中国から伝わる「儒教の伝統的な理念」つまり尊老の観点に基づくものであることは間違いない。ただし律令は、これらの年齢を区分することで優遇措置を設けると同時に、そうした年齢区分によって課役・兵役負担者の確保をも行おうとしている。戸令第八・6には、年齢区分についての次のような規定がある。

凡そ男女は、三歳以下を黄と為よ。十六以下を小と為よ。廿以下を中と為よ。其れ男は、廿一を丁と為よ。六十一を老と為よ。六十六を耆と為よ。夫無くは寡妻妾と為よ。

ここでは、三歳以下の人民を「黄」、四歳以上十六歳までを「小」、十七歳以上二十歳以下を「中」「中男」、二十一歳以上六十歳以下を「丁」「正丁」、六十一歳以上六十五歳以下を「老」「次丁」、六十六歳以上を「耆」と定めている。「丁」は課役負担者たることを示す。「正丁」は兵役と調庸負担者の中核を為し、「次丁」は「正丁」の二分の一を負担、「中男」は調については「正丁」の四分の一を負担するが庸の負担はなかった。そして、残りの十六歳以下の「黄」と「小」、六十六歳以上の「耆」、ならびに女には課役の負担義務はなかったことになる。

これらを社会的生産能力という点から言い直すならば、「正丁」にあたる二十一歳以上六十歳以下の男は〈完全生産能力者〉であり、「次丁」「中男」にあたる十七歳以上二十歳以下と、六十一歳以上六十五歳以下の男は、課役の一部を制限（免除）されている〈制限生産能力者〉である。そして十六歳以下と六十六歳以上の男、ならびに女には課役負担がないことから、社会的生産能力としては〈無能力者〉ということになる。[14] さらに、〈無能力者〉のなかでも侍給と賑給を受けるべき八十歳以上は、自分自身で社会的生産を生み出すことができないばかりか、他人の生産力を消費することを国家によって保障される存在であり、これは社会的生産能力からすれば〈無能力〉というよりもむしろ〈反・生産力〉に位置する人々だと言えよう。〈完全能力者〉を社会的に一人前の人間とみなすのならば、〈制限能力者〉〈無能力者〉は社会的責任能力としては半人前ということになる。とすれば、生活上「侍」を必要とされる八十歳以上の老人は、単に「生産能力がない」、あるいは「生産とは無関係」というだけではなく、もはや一人では人間としての生活も送れないと見なされた存在なのであり、社会的には〈人間〉の範疇からはずれた存在として線引きされているのである。〈非人間〉とでも表記すれば、その差別的なありようは一層明確になろう。

以上が律令から読みとれる「年八十」の社会的な位置である。無論、本稿は「物語は律令コードですべて読める」とか「手習巻の母尼の年齢設定に、律令で規定する『年八十』の位置づけがそのまま適用されている」などと主張したいのではない。そもそも、平安中期において律令の規定がどれほど厳密に適用されたかは定かではないし、母尼のような僧籍にある身に、これらの規定がどの程度適用されたかも不明である。しかしながら、80歳を境界として線を引き、それ以上の老人に優遇措置を設けた律令が、80という年齢から喚起される当時のイメージと全く無関係であるということもできないだろう。それは、律令の規定によって80歳が常人では希有な（人ではない）高齢として定められたというよりも、80歳が実際にそうした高齢であることを前提として律令の年齢区分規定があるということではないか。だとすれば、律令は80歳という年齢に対する一つの決定的なイメージを具現化したものだということになる。そして、手習巻の母尼の語られた「八十あまり」という年齢も、そのようなイメージを母尼に付与するものだったのではあるまいか。

社会的には〈非人間〉に区分される「八十」という年齢の特殊性は、浮舟が母尼を闇のなかで鬼と見た場面に象徴的に表れている。浮舟が感じ取った母尼の気配は、もはや常人の範疇を越えたものであった。彼女は母尼に〈人間〉を感じ取れなかったのである。視覚を奪われた暗闇のなかで、母尼の「あてなる人」という身分や出家者という社会的位置などを取り払ったところの、「八十あまり」の母尼の本性を感じ取ってしまったということではなかったか。その一夜の後、浮舟は自らを脅かした母尼に出家の意志を告げ、母尼が横川の僧都に浮舟の意志を伝達することで、浮舟の出家は成就した。

今度こそ浮舟は救われたと実感するのであるが、それを可能にしたのは「八十あまり」の〈人間〉でないような、社会的生産性からは最も遠い存在である母尼だったのである。

翻って考えてみれば、妹尼は、浮舟を慈しみ、幸福を祈って中将との結婚を勧めようとしたのであって、決して浮舟を苦しめようとしたのではない。結果的に浮舟がそれを受け入れなかった（受け入れられなかった）、ということである。横川の僧都でさえ、浮舟が出家するときには「女の身といふもの、いとたいだいしきものになん」［手習・三三五頁］と言い、「女の身」ひとつでの出家を反対している。小野の人々はそれぞれの立場から、美しい容貌を持て余している浮舟が「女の身」としての生産的な幸福（＝しかるべき男性と結婚し、子を産む）を手に入れられるように願い、心を砕いていたのである。しかし、そうした中にあって、母尼には浮舟の幸せなど思案の外であった。中将の夜這いの邪魔をし、何の考えもなしに浮舟出家の意志を横川の僧都に仲介したその行動は、社会的には浮舟の女としての幸せ（＝結婚・出産）を奪っていく行為として受け止められるものである。「八十あまり」の母尼は、浮舟の「女の身」としての幸福に思いが至らない。それは、「八十あまり」という母尼の年齢が語られることで、母尼には社会的生産性とは無縁の存在（＝反・生産性）であることが要請されるからなのであるが、しかし浮舟の出家は、そうした母尼の存在があってこそなし得たのものなのである。言うまでもなく、浮舟の出家に社会的な生産性はない。だが、社会的な女の幸福とは本当に真の幸福たり得るのだろうか。ここにいたって『源氏物語』は、社会的生産性とは無縁な母尼という存在の登場を媒介としつつ、「女の幸福とは何か」と問うているように思える。

四　『源氏物語』の終焉――光源氏時代を担う母尼――

これまで、手習巻における母尼の役割・機能と明示された年齢との関連について考察してきた。そして、母尼の「八十あまり」という特殊な年齢が、場面的にも主題的にも大きく展開させる要素として重要な意義を有していることを明らかにした。

しかし、なお大きな問題が残されている。前述したように、「八十あまり」の母尼は、『源氏物語』中で具体的に確認できる最高齢の人物なのだが、そのことの意味を、手習巻だけにとどまらず物語全体の中で定位する必要がある。それは、「八十あまり」という年齢が『源氏物語』の末尾近くにいたって現れることをどう理解するかということでもある。

年立によれば、手習巻は桐壺巻での光源氏誕生から七十四年後の物語であり、したがって「八十あまり」の母尼は光源氏よりも十年ほど年長ということになる。桐壺巻冒頭で語られる桐壺帝による桐壺の更衣偏愛という事件は、手習巻の母尼誕生後の出来事であった可能性が極めて高い。母尼の「八十あまり」という年齢は、桐壺巻以前にすでに〈生〉を受けた人物が、手習巻の物語の現在もなお生

き続けていることを語るものともなろう。光源氏没後、物語は次世代の若者たちの活躍を語り、宇治へと舞台を移し、光源氏と同世代の人々はことごとく物語から姿を消していった。しかし、もはや終息に向かいつつある物語の最終局面に、すでに忘れ去られたはずの光源氏世代の一人が再登場するのである。旧世代としての母尼が、今、ここになって現れたことの意味は一体何なのか。

母尼は、「昔」の再現に固執する妹尼とは対照的に、高齢ゆえに「昔」を忘却した存在として描かれていた。だが、そのような母尼にも唯一忘れていない「昔」があった。第二節で触れた、浮舟の一度目の危機の際に、中将が吹いた笛の音を聞きつけて母尼が出てきてしまう場面で、母尼は中将の吹いていた「盤渉調」[手習・三一九頁]を愛でて次のように語る。

「嫗は、昔、あづま琴をこそは、事もなく弾きはべりしかど、今の世には、変りにたるにやあらむ、この僧都の、聞きにくし、念仏よりほかのあだわざなせそとはしたなめられしかば、何かはとて弾きはべらぬなり。さるは、いとよく鳴る琴もはべり」と言ひつづけて、いと弾かまほしと思ひたれば、(後略)。

[手習・三二〇頁]

母尼が「昔」について語るのは、この場面のみである。つまり、母尼が唯一覚えている「昔」とは、自分が「昔」、あづま琴の名手であったということである。そして、琴を弾きたくて仕方のない母尼の様子を見て取った中将が母尼をおだてたので、母尼は喜んで琴を弾く。

「いで、主殿のくそ、あづまとりて」と言ふにも、咳は絶えず。(中略)取り寄せて、ただ今の笛の音をもたづねず、ただおのが心をやりて、あづまの調べを爪さはやかに調ぶ。みな異ものは声やめつるを、これにのみめでたる、と思ひて、「たけふ、ちちりちちり、たりたんな」など、掻き返しはやりかに弾きたる、言葉ども、わりなく古めきたり。[手習・三二〇～三二一頁]

しかし、母尼が弾き始めたのは先程中将が吹いていた「盤渉調」ではなく、「あづまの調べ」であった。母尼は、ただ自分の気持ちのおもむくままに「あづまの調べ」をかき鳴らす。この「あづまの調べ」は、おそらくはあづま琴の名手と讃えられた「昔」、母尼が最も得意としていた調べだったのであろう。しかし和琴は、決まった演奏法もなく演奏者の感性に委ねられ、当世風に弾くことを求められる楽器である。[15]「昔」のままの「調べ」を奏でる母尼のあづま琴は、必然的に「わりなく古めきたり」と評されてしまう。「昔」もてはやされた母尼のあづま琴は今、時代遅れの憂き目をみることになったのである。

母尼が弾いた「あづまの調べ」がどのような「調べ」であったかは、現在のところ不明というほかない。[16]『源氏物語』での用例も、この例を含めて二例のみである。いま一つを次に挙げる。

今は何につけてか心をも乱らまし、似げなき恋のつまなりや、とさましわびたまひて、御琴掻き鳴らして、なつかしう弾きな

したまひし爪音思ひ出でられたまふ。あづまの調べをすが掻きて、「玉藻はな刈りそ」とうたひすさびたまふも、恋しき人に見せたらば、あはれ過ぐすまじき御さまなり。［真木柱・三九二～三九三頁］

髭黒と結婚した玉鬘を思い出し、ひとり「あづまの調べ」をすが掻く光源氏。この時「あづまの調べ」を弾く光源氏は、語り手によって「あはれ過ぐすまじき御さま」と賞賛されている。『源氏物語』で「あづまの調べ」を奏でた人物は光源氏と手習巻の母尼の二人だけである。そして、光源氏は語り手によって賞賛され、一方の母尼は非難される。おそらく光源氏が奏でた「あづまの調べ」と光源氏と同世代の母尼が「昔」奏でた「あづまの調べ」とは、もともとは同じく賞賛されるべき「調べ」だったのであろう。それが時を隔てた手習巻の今となっては、時代遅れになってしまったのである。かつて、常に文化の中心にその身を置いていた光源氏が奏で、賞賛された「あづまの調べ」が、今や周囲の非難さえ浴びている。それは、光源氏世代の文化が否定されたともいえる、決定な瞬間なのであった。

手習巻における「八十あまり」の母尼の登場は、光源氏世代の物語への再登場という意味をも持つ。しかし、すでに時代は次世代へと移っており、かつて賞賛された母尼の琴ももやは顧みられることはない。しかも、母尼自身、周囲の冷ややかな反応に全く気づかない。中将の「いとをかしう、今の世に聞こえぬ言葉こそは弾きたまひけれ」［手習・三二一頁］という嫌味と皮肉を大いにこめた褒め言葉すら、耳が遠くて聞き取れないのだ。母尼の老耄は、光源氏世代というものがもはや世の中からはじき出された存在であることを語るものではないだろうか。光源氏の栄華を語り続けた物語は、すでに、そして確実に終焉に近づきつつある。

おわりに

夢浮橋巻の末尾部で、小野の草庵の「主」が交替していることが判明する（夢浮橋・三九三～三九四頁）。手習巻では、小野の草庵の「主」と呼ばれるのは母尼であったが（手習・三〇〇頁）、夢浮橋巻の末尾部では妹尼が「主」と称されているのである。この「主」の交替が、母尼の死去によるものかどうかは定かでない。しかし、この夢浮橋巻の末尾は、「主」交替を語ることでさりげなく〈母尼不在〉を示すのであり、母尼の「物語の登場人物としての〈死〉」を読者に訴えているものなのである。光源氏世代最後の生き残りの〈死〉――桐壺巻冒頭からこの世（物語）にあった者の、最後の人物が〈死〉を迎えたのだ。そのことを暗に語りつつ、〈光源氏の物語〉すなわち『源氏物語』は幕を閉じるのである。

手習巻の母尼の「八十あまり」という明示された年齢は、単にモデルとしての源信の母尼を想起させるだけでなく、『源氏物語』固有の自立した登場人物として、〈生〉かされていくために語られたものなのであった。「八十あまり」の母尼は、物語のなかで浮舟を

出家に導くきっかけを作り、浮舟物語の終焉に関わっているだけではなく、光源氏世代の末路を体現したものとして、『源氏物語』全体の終焉をも担う存在であったのだ。

七十五年もの長大な〈時間〉を語った物語は、母尼の〈死〉とともに、その終わりを迎える。

注(1)吉海直人「「その頃」考―続編の新手法―」(『源氏物語研究而立篇』、影月堂文庫、一九八三年一二月)、野村倫子「「手習」の冒頭をめぐる覚え書き―「浮舟物語」後半の始発―」(『古代文学研究第二次』四号、一九九五年一〇月)

(2)『源氏物語』の引用は、すべて新編日本古典文学全集『源氏物語』(小学館)に拠る。なお引用本文には私に傍線等を付し、末尾に巻名・頁数を記した。

(3)横川の僧都については、広川勝美「浮舟の救い―その課題と横川僧都の役割」(『日本文学』一三巻三号、一九六四年三月)、岩瀬法雲「横川の僧都の二面性」(『源氏物語と仏教思想』、一九七二年、笠間書院)、中哲裕「横川の僧都」(『文学・語学』八四号、一九七八年一二月)、丸山キヨ子「横川の僧都」(『講座源氏物語の世界』第九集、一九八四年一〇月、有斐閣)、三角洋一「横川の僧都小論」(『源氏物語と天台浄土教』、一九九六年一〇月、若草書房)、などに詳しい。

(4)『河海抄』巻二十(手習)に、「なにかし僧都とは恵心僧都事歟遁世之後隠居横川谷仍号横川僧都母事妹安養尼事相似たり」(玉上琢弥編『紫明抄　河海抄』(一九七三年六月、角川書店))とある。

『源氏物語』の年齢明示の方法(外山　敦子)

(5)永井和子「源氏物語の老人―横川の僧都の母尼君」(『源氏物語と老い』、一九九五年五月、笠間書院)

(6)この説話の概要は以下の通りである。源信は、「三条ノ大后ノ宮ノ御八講」(引用は、新編日本古典文学全集『今昔物語集　二』(小学館)に拠る)の折にいただいた棒物を母に見せたところ、母はそれを喜ばず、「このような俗僧となるよりも多武峰聖人のような真の聖人になれ」と戒めた。源信は大いに反省し、山籠もりを始める。母は「こちらから便りをしない限り、山から決して下りてはならぬ」と訓戒し、源信はその教えを守った。九年が過ぎたある日、源信は妙に胸騒ぎがしたため、約束を破って母に会おうと山を下りるが、途中で母の手紙を持った使いに出会う。手紙の内容は「限りの時が来たので早く会いに来てほしい」という下山要請であった。母のもとへ急いだ源信はなんとか母の臨終に間に合い、母を念仏往生させた。母子の情愛と母の往生を語った話である。

(7)日本古典文学大系『今昔物語集　三』(岩波書店)、三九七頁の頭注

(8)前掲(5)七七頁

(9)前掲(5)六一頁

(10)『源氏物語』の「昔」の用例(全四一九例)には、「昔」(三四四例)、「昔語り」(六例)、「昔ざま」(三例)、「昔のためし」(二例)、「昔の人」(一七例)、「昔の世」(七例)、「昔人」(七例)、「昔物語」(三一例)、「昔物語めく」(一例)、「昔やうなり」(一例)がある。

(11)清水好子「若菜上・下巻の主題と方法」(『源氏物語の文体と方法』、一九八〇年六月、東京大学出版会)

(12)引用は、新日本古典文学大系『袋草紙』(岩波書店)に拠る。

(13)律令の引用は、すべて日本思想大系『律令』(岩波書店)に拠る。

(14)黒田日出男「「童」と「翁」―日本中世の老人と子どもをめぐって―」(鎌田東二編『民衆宗教史叢書27　翁童信仰』、一九九三年五月、雄山閣出版)

(15)和琴は、若菜下巻に「跡定まりたることなくて」〔一八八頁〕、「をりにつけてこしらへなびかしたる」〔一九六頁〕ことが大切という。

(16)新日本古典文学大系『源氏物語』三、一四二頁脚注など。